

資料館だより

Vol.43 No.1 (通巻218号)

2018.6.25(年4回発行)



「庭訓往来」



「新板塵劫記」寛政9年



「実語教・童子教」文化6年



掛図「第三博物図」明治6年



地理「日本地誌略」明治7年



国語「尋常小學校新體讀本」



「尋常小學校讀本」

明治27年



「高等小學校地理書附図」

大正15、昭和8年



国定教科書「鉅物標本」昭和7～15年

「小学生の科学」
昭和25年

検定教科書 (理科、書き方、社会)

昭和43～45年



国定教科書 (図画、国語、書き方、算術)

明治38～大正8年



寄贈資料の中から 教科書

今回は、資料の中から主に初等教育に使用された教科書を紹介します。最も古い教科書に平安時代末の往来物とよばれる手紙の文例集があります。往来物は後世に項目が多様化し、明治時代初めまで使われました。

江戸時代に入り経済が活発化してくると、庶民にも文字などの習得が必要となり、寺子屋が普及しました。寺子屋での学習内容は手習い、素読、算術などで、実生活に必要とされることが中心でした。手習いや素読に用いる本の多くは、読みやすいよう文字を大きくしています。「塵劫記」は、算盤の教科書として人気を呼んだことから版を重ね、多数の異本が出版されました。

明治4年に文部省が設置され、翌年に学制を公布しました。これは各地に学校を設立することで、すべて

の国民が平等に教育を受けることを目指したものです。教科や教科書は一変し、欧米の教科書を翻刻・翻訳したものが多く使われました。掛図はこの頃に米国から導入した教材で、壁面に絵図や表を掲げて一斉授業を行うためのものです。

明治19年に、教科書の統一をはかるため検定制度が実施されましたが、贈収賄事件を機に明治36年に小学校教科書の国定化が決まり、用紙も和紙から洋紙へと変更されました。昭和20年の敗戦後には国定教科書を修正して使ったり、未製本のもの配られたりしました。昭和22年には検定制度の実施が定められ、昭和24年から検定教科書が使われ始めました。そして昭和39年以降に、教科書の無償給与が始まりました。

駿河湾の漁

金指 貢さんの漁話

船の守護神 フナダミサン

船を新しく造った時に初めて海に入れることをフナオロシ（船下ろし）と言います。フナオロシに先だって造船所で船大工の棟梁が船に人形・髪の毛・サイコロ・五穀・12枚の硬貨といったものを納めます。これをフナダミサン（船霊）と言ひ、船の守護神として航海の安全や大漁をもたらしてくれるものと信じられています。木造帆船の頃は帆柱を支えるツツバシラ（筒）に穴を開けてフナダミサンを納めていましたが、時代は変わり、船材は木からFRP（繊維強化プラスチック）となり、帆からエンジンによる動力船となった現代の船では箱を作ってフナダミサンを納め、船橋に釘などで打ちつけています。

フナダミサンを船に納め終わるといよいよ海に船を下ろします。金指さんが幼少の頃、両親がいる子供がドウノマ（甲板中央部）に陣取り、回りからの「ヤーンヤ、ヨー」の掛け声に合わせて、手に持った板子で2回トントンと甲板を打ちつけます。このやり取りを続けながら、船を曳いて造船所から海へと船を下ろしていきます。船が海に下ろされると内浦湾を反時計回りに3周回り、その後、長宝組の網元や乗組員、船を造った船大工を集めて当番の家で宴会を行います。フナオロシを行った翌日、漁業の神様として崇拜されている西浦江梨にある大瀬神社へ大瀬詣りに行きます。大瀬詣りに行く時も帰る時も内浦湾を反時計回りに3周回ります。

年が明けると長宝組の網元が集まり、船のノリゾメ（乗り初め）として大瀬詣りを行います。全国的に見るとノリゾメが行われる日は1月2日ですが、長宝組が所属する内浦小海の港では1月1日に行われます。この日の早朝5時に当番の人が「今日はノリゾメをやるから男衆も女衆も宜しく願ひします。」と網元を歩いて回り、ノリゾメの支度が始められます。この日

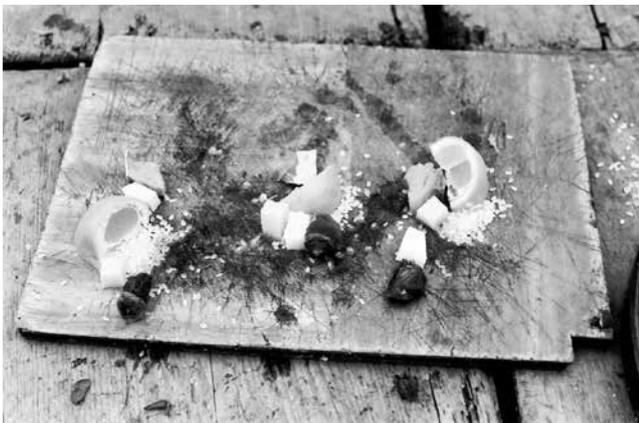


写真1：板子の上に乗せられたノリゾメの供物 1975年

には供物として餅が供えられます。直径30cmぐらいの白いひと重ねの丸餅の上に白色・黄色・白色となるように3枚の菱餅を重ねて載せます。この餅を船に持って行きます。3枚の菱餅を細かく刻み、これと刻んだみかん・洗米・サケかマスの切り身・串柿を板子の上に3つの山になるように載せてからそれぞれの山へ神酒を掛けていきます（写真1）。この供物を載せた板子は、船のオモテ（前方部）と船のトモ（後方部）へ供え、フナダミサンへは神酒を供えます。ノリゾメの船へのお供えが終わると、大瀬詣りに向かいます。この時も行く時と帰る時に内浦湾を3周回ります。大瀬詣りから帰ってくる11時頃から当番の家に網元が集まり、宴会となります。菱餅の下に敷いた丸餅は1月11日のソナエワリ（鏡開き）の時に切り分けます。この日の夕方には長宝組の網元と乗組員が当番の家に集まり、切り分けた丸餅を焼いておしるこに入れて振る舞い、その後、宴会となります。

長宝組では特にマグロ漁を重視しています。その年に初めて行うマグロ漁が始まる前には神酒とオヒカリ（ロウソク）をフナダミサンにお供えしていました。これはマグロ漁を行うマカセ網や巾着網で行いましたが、他の魚を捕る網漁では行いません。普段はフナダミサンに何かをするということはありませんが、漁が少なくなってくるとフナダミサンに大漁をもたらしてくれるよう手を合わせて願掛けをしました。その年のマグロ漁が終わりを迎える時にはフナダミサンに手を合わせて感謝を示す漁師もいました。

船の寿命が終え、廃船にしなければならない時がいつでも訪れます。船に納められたフナダミサンもその役目を終えることとなります。この時には神社の神主を呼び、フナダミサンをお祓いしてもらって船から下ろします。昔は下ろしたフナダミサンを家に持ち帰って神棚に祀っていましたが（写真2）、現在では大瀬神社に奉納しています。

（話：金指 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市三津在住）



写真2：金指家の神棚に祀られているフナダミサン 2015年

地図から見た沼津⑤ ^{の がた はまかた}「野方・浜方と甲州街道・古道」

加藤 雅功

天保6年(1835)の『本町野方絵図』を基本として、天保8年(1837)の『沼津本町絵図』や明治5年(1872)の『東間門村縮図』などを比較しながら、開発の過程や景観の変遷を追ってみたい。

野方(農地側) 浅間神社の西、乗運寺や東方寺の間を通る「千本浜道」の南側には下田など評価の低い水田や畑地が広がり、旧字汐入や三反深・五反田、竹之後や沓形、砂原圃・妙見前など不整形な区画をなしていた。弥生時代後期から古墳時代の常盤町遺跡(永明寺領の畑と塚)のある字「砂原」の北側、字二反田の西側(旧字妙見林)の妙見塚は、独立標高点(4.2m)の表記から円墳と推定され、現在の常盤町2丁目付近と見られる。常盤町1丁目の旧字如来堂には、北側から如来堂、如来堂畑、妙海寺旧地があり、現在では妙海寺墓地となり、妙覚寺とともに八日堂の聖地である。かつて字天王小路には天王社(祇園社)があった。

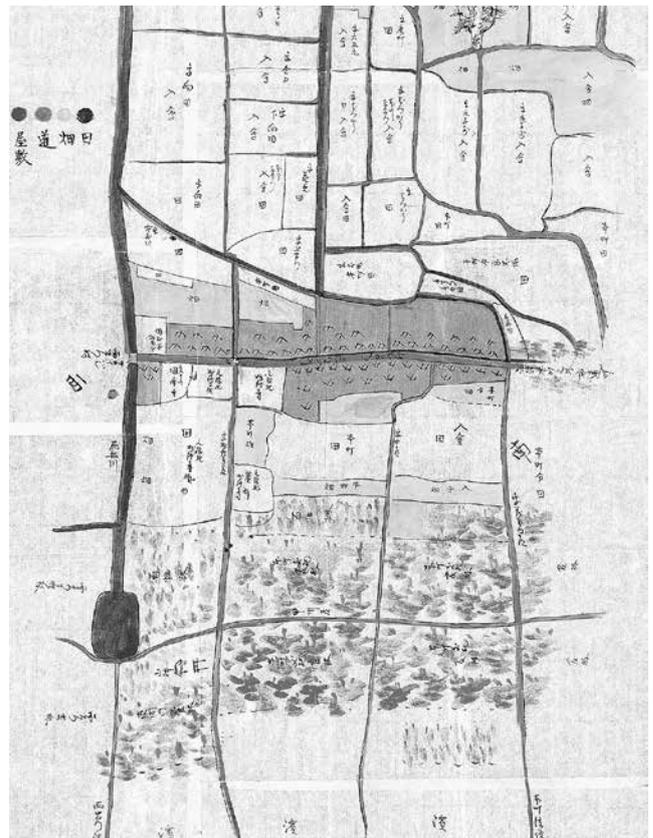
観音川(子持川とも)の左岸側、下一丁目付近では字前田の南側、乗運寺後に百姓家が後に形成される。出口町には沼津宿西見付の見附番所や松月院(十王堂)があった。子持川橋(五反田橋・幸橋)の西、街道の松並木と市道(五反田)の南側は草刈川の灌漑による「松下耕地」であり、松下八幡給から松下藪鼻、松下下舞台、松下五反田から浜寄りの字松下にかけて、比較的評価の高い水田が広がる。街道の南側では西の妙傳寺浜道から子持川に至るまでの耕地が全て「松下」を冠し、畦の両側に溝を巡らす特異な水田であった。

浜方(千本松原側) 長谷寺観音堂は、長谷寺(浜の観音)と呼ばれ、砂丘上に立地した。寺の東側の旧字浜道下には永明寺の旧地があった。狩野川の洪水被害で下河原から不動堂明星寺に仮寓し、その後、出口町の大聖寺脇に寺は移転している。かつて字不動塚には不動院があり、円墳の不動塚は消滅した。御林側(旧八角池の東)には火防の神を祀った秋葉社があった。塩の道の甲州道(甲州街道)沿いには首塚があった。

中世に「千本の松」「千本の松原」の古称があり、千本郷林も千本御林から転訛した。「千本砂礫州」には並列の砂丘が覆い、高潮や風害・塩害を防ぐ松原が、沼津公園や千本浜公園となった。観音川右岸、松下七反田の水田に対し、畑地側は後に「緑町」が誕生する。松原寄りには牢屋や役人(非人)の居住地があった。

東間門の妙傳寺西側の本町境で、網場への浜道近くで甲州街道の北側、字松林の妙傳寺墓地と現在の東間門区有墓地の東側に「六代松旧跡」がある。六代松碑が残る地で、絵図では平六代に因む六代君旧跡と記す。

草刈川と放水路 「沼川」は大川とも呼ばれ、愛鷹山麓を流下する谷戸川・中沢川・西川などのほか、支流



駿河国駿東郡東間門村縮図(南半部)

(明治5年 明治史料館保管 東間門田中家文書 沼津市史別編絵図集から転載、右上 丸子神社旧社)

の高橋川を合わせて原・浮島方面に西流する。又井から分水する灌漑用水路の「草刈川」は東間門と西間門の大字の境界となっている。字向田付近で新たに分水した放水路は『沼津本町絵図』では、「悪水払い」の堀割(排水路)の先、甲州道に接した字松林(山神社の西)に「悪水溜」の溜池が構築されていた。

また、近世中頃の『御城下三町巻紙絵図』には街道の南側(字久保)に「悪水吸込」が3か所掘られていた。「吸い干し」とも呼ぶ排水溜め池で、東側の草刈川の分水で、藪鼻の松原にも小規模なものがあつた。

『東間門村縮図』では「尻無川」と呼ばれ、掘削技術が未熟で、直接駿河湾に放流できなかつた頃は「尻無し」の状態であつた。「千本砂礫州」の砂礫層に深い穴を掘削し、溜め池で調整し、かつ自然に浸透するのを待つ故に減水効果も低かつた。三味線の棹と胴の形状に似て「三味線堀」とも呼ばれた。戦中の一時期、土木工事に囚人が動員された関係から「囚人堀」の別名が付き、現在では「新中川」として整備されている。

東海道以前の古道 『本町野方絵図面』から古道を確認していく。沼津本町の大門町から旧正見寺の北、上土分であつた八幡町の旧本光寺の南側の大字境を経て、郷蔵、触れたならば瘡に罹ると忌むヲコリ石(姥石)や小社の先で子持川橋となる。字山神道の畑地に山神社(後に末広神社に合祀)や沼津城主の久保忠佐の

供養墓の道喜塚（第一小学校校庭内）があり、当時まだ水田が広がっていた字西之城（後に西条町）の北側、字阿宅丸（安宅丸）へは「根方道」が延び、東西には米ツキヤ之道・西之城之道が記されている。

子持川橋の西側は南に蓮池、北に祢宜ノ後・郷地の畑地を過ぎ、山ノ神・釈迦堂（慈光院）の裏から西側で東海道に出る。東海道の間道だが、中世の有力な古道ルートである。字犬塚の北側、丸子前・堂舗免（堂敷免）には古社の丸子神社が鎮座していた。また、橋

の北側の子持川沿いには、沼津新田（現本田町）へと「新田道」が延びる。幟道や登道の字が後に用いられるが、道ではなく「登り堂」からの転訛と見られる。

子持川の、より上流側の本町溝（登道用水）は「三枚橋分か去れ」と分岐後、「本町分か去れ」側は本町溝（大溝）となる。字七反田を流れる東側の「大溝」の分水はガトロ用水（我通路川）と呼ぶ。カトロやガトロの当て字を解釈し、「我歩を通す。此の路可なり。」として、元暦頃の伝承とする古道説は否定する。

資料館からのお知らせ

企画展『いのりの海』終了

企画展「いのりの海」は、好評の内に、5月6日をもって終了しました。

内容が、漁村の信仰というテーマでしたので、小学生の皆さんには、少し難しすぎたようです。

展示の成果は、図録としてまとめられています。展示より少し詳しい内容となっていますので、見逃した方は図録を御覧いただきたいと思います。図録は現在も資料館で頒布しています。（頒布価格 600円）



展示風景（船霊様）

夏休み体験教室の募集

夏休み体験教室の参加者を募集します。

対象 市内に住む小学校3年生以上の児童

期日 平成30年8月10日（金）・11日（土）

10:00～12:00

内容 火打ち金の火起こし、石臼による粉挽き、秤での重さ計りの体験など

事前予約が必要です。応募方法については、『広報ぬまづ』7月1日号を御覧下さい。

お問い合わせは資料館までお願いします。



昨年度の体験学習の様子

資料集『駿東郡原町誌』の刊行

資料館の資料集31として、静岡県立中央図書館で所蔵する、大正2年作成の『駿東郡原町誌』（中表紙には「原町誌稿」とある。）を翻刻しました。今まで、市立図書館の複写本を利用するか、県立中央図書館のデジタル画像を閲覧するしか利用手段がありませんでしたが、容易に利用できるようになりました。カタカナ表記をひらがな表記に改め、より読みやすくなっています。郷土の歴史を知る資料として、活用いただきたいと思います。資料館にて頒布しています。

沼津市歴史民俗資料館だより

2018.6.25 発行 Vol.43 No.1（通巻218号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp